

文学篇

映画文学人生論

- 0561) 小説神髓 坪内逍遙 (1859-1938)
0571) 私は懷疑派だ 二葉亭四迷 (1912-1976)
0581) 小説の終焉 川西政明 (2004)
0591) 文学論 夏目漱石 (1907)
0601) 『こころ』は本当に名作か 小谷野敦 (2009)

目に見えるものはすべて幻かもしれない

文学とはなにか。目に見えるものも見えないものもすべて幻かもしれないのに、情報過多で頭が混乱している。頭をすこし整理しておきたい。

坪内逍遙 小説神髓

二葉亭四迷 私は懷疑派だ

川西政明 小説の終焉

夏目漱石 文学論

小谷野敦 「こころ」は本当に名作か

まず、坪内逍遙の『小説神髓』。これが混乱のもとではないか。明治以前には、文学といえば漢文学であり、戯作、物語、和歌、俳諧などは文学とみなされていなかったが、『小説神髓』によって、小説が文学の主流になったというのが文学史の定説だ。

この定説をいったん疑ってみよう。二葉亭四迷が坪内逍遙の名前をかりた『浮雲』が言文一致体による日本初の近代小説とされているが、四迷は「私は到底文学者じゃない。私は、まア、懷疑派だ」と文学者としての自分を否定している。

勸善懲悪を否定する写実的な近代文学。その文学者としての自分を四迷が懷疑した理由は、おそらく理想（アイデアル）の欠如だろう。その点については森鷗外も問題にし、坪内逍遙を相手どっていわゆる没理想論争を挑んだことがある。



明治期の二葉亭四迷(東京外語学校時代)

文学篇

映画文学人生論

伝統的な漢文学の素養があれば、没理想の文学に抵抗を覚えるはずだ。二葉亭四迷や森鷗外や夏目漱石にはその素養があった。もつと後の世代では明治四十二年生れの中島敦にもあった。

中島敦『弟子』の主人公は子路。「我、長剣を好む」という游侠の徒で、「学、豈(あに)、益あらんや」と孔子に挑戦した。学とは文学のことである。

子路は約二千五百年前の文学懐疑派だが、孔子に説得されて、弟子になった。四迷、鷗外、漱石も後世における孔子の弟子だが、西洋の近代文学の洗礼を浴びて、ぐらついた。

ロンドンに留学した漱石は、「漢学に所謂文学と英語に所謂文学とは到底 同定義の下に一括し得べからざる異種類のものたらざるべからず」として独自の研究をすすめ、『文学論』を著した。

川西政明の『小説の終焉』は『浮雲』以後約百二十年間の小説の終焉を論じている。芥川龍之介の理智の文学、志賀直哉の自我と自由の文学、川端康成の日本と向き合う文学、太宰治の家からの逃亡の文学、大江健三郎の自己の死と再生、村上春樹の比類なき時代の正統の文学がすべて終焉。夏目漱石は終焉を迎えたとされていらないが、小谷野敦が『「こころ」は「本当に名作か」と疑ったように、漱石の文学にもかげりはある。

叩かれて昼の蚊を吐く木魚哉

漱石